
鼠の電話番

北極猿

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鼠の電話番号

【Nコード】

N5378D

【作者名】

北極猿

【あらすじ】

ある夜、自分の孫が死に掛けているさなか、老人の思い出も消え去ろうとしていた。哀しくも抗うことのできない時代の移り変わりに、老人は若かりし自分を見てなにを思うのか。The Strokes - 「The End Has No End」より。

(前書き)

この小説は企画小説です。「鼠小説」と検索すると他の先生方の作品も読むことができます。

しかし残念ですが、今回の参加者は僕のみとなってしまうかもしれません。ご了承ください。

長いあいだ思い出せずにいる情景がある。これまでの人生で最も大事とさえ言える情景だ。峰岸老人は背もたれの無い三脚椅子に座りながらじつと電話を眺め、そのことについて終わりのない模索を続けていた。選択することを根本から否定していた時代、勇猛果敢でなおかつ暴力的でもあった青年時代。彼の胸には驚きと緊張よりも、深い哀しみがあつた。それは自分の孫が死にかけているせいというよりも、若かりしころの自分が思い出から永遠に姿を消そうとしている事実だつた。

こつこつと時を刻む、壁に掛かった古時計。生ぬるいウイスキーを喉の奥に流し込み、峰岸老人は深いしわの刻み込まれた両手を眺めた。ためしにゆっくりと手を閉じたり開いたりしてみる。このころでは、寒い日になると手が嫌というほどに痛んだ。自分が歳をとつたということを否定するのにも、もはや疲れ果ててしまった。

彼はおもむろに受話器へ腕を伸ばし、震える指でひとつずつナンバーを押した。

「まだわからないの、おじいちゃん。ねえまだわからないんだつてば」

孫娘の声は苛立っていた。無理もない。血を分けた弟が片足をもがれ、今なおベッドの上でもがき苦しんでいるともなれば。

「お母さんに代わってくれないか……今家で探し物してるんだ」

「おじいちゃん、お母さんはいないの。お母さんはいない」

「いるさ。だつてさっき」

「ねえ、今がどんな事態かわかつてる？ 淳が死にそうになってるの。なにか探しものがあるんだつたら明日にすればいいでしょう」

「アルバムが欲しいんだ」

なにかを推し量る沈黙があつた。数秒おいて、電話ががちゃんと切れた。

峰岸老人は諦めて受話器をおき、自分の膝を押し立て立ち上がった。蔵書まで歩きだそうとしたそのとき、彼はまたひとつ大きな事実を忘れていた。もはや自分の足は意思どおりに動いてくれないのだ。

壁に手をかけ、彼はゆつくりと半歩ずつ部屋を進んだ。床とスリッパの擦れる音が、もぬけのからとなった家に響き渡る。胸が大きく膨らみ、首といっしょに肩が上下した。どうしてあところに死んでしまわなかったのか。そんな無茶な考えが、執拗に彼の老いた心を揺すぶった。今では死ぬ気力さえ残されていないようだった。

どうにか蔵書にたどり着くことができる、彼は書架にしがみつくような格好で、踏み台に腰を下ろそうと試みた。しかし体勢がくずれ、棚にしがみつこうとはしたものの、重い体は幾冊かの本といっしょに床に叩きつけられた。そのまま痛みで気を失ってしまった。うだった。だが書架のいちばん下、誰も読まなくなつた分厚い本たちのあいだに、かすかにだが見覚えのある赤い表紙を目にしたことで、その意識はなんとか紡がれた。

彼は本に向かって懸命に手を伸ばした。ゆつくりと一ページ目を開いてみる。まさかという驚きが、始めに彼の心を打った。写真に写っているのはいったい誰だろうか？　これが若かりしころの自分だというのだろうか。

そこにはすっかり年下になってしまった自分の母の姿と、学生帽をかぶつたか細い少年が写っている。そばには明治大学の看板が掲げられ、灰をまぶしたように景色は一面くすんでいる。母親が息子を自慢するために、幾度となく人の手へ写真を見せて回つたのだろう。真ん中のところに穴があくほど畳み込まれ、角のところはぼろぼろになっている。

彼の目は夢物語を見るように輝いていた。息が乱れ、説明しようのない歓びが心を満たした。笑い声がもれ、次に「ああ、ああ……」という虚ろな喘ぎが漏れた。寸暇を惜しんで東京中を駆けずり回つたあのころ、出会うものすべてに尻込みすることなく踏み入ってい

けた時代。遠いさざなみが消え去ってしまうまで、彼はその場所を離れることができなかった。

そのせいで、電話が鳴っても立ち上がるという気になれなかったのかもしれない。峰岸老人が写真をアルバムから引き剥がし、胸のポケットにしまいこんだときには、世の中がもう朝を迎えていた。彼は長い時間をかけて電話のあるキッチンに戻り、受話器を手にした。

「……なにをしてたの？」

静かな声だ。そこには激しく感情が乱れたあとの余韻が残されていた。

「淳はどうだった。無事か」

「うん、無事みたい。でも二度と両足で歩くことはできないけど」「そうか」

「もうお母さんはそっちに向かつてる。おじいちゃんも眠って」
誰もが疲れ果てていた。峰岸老人は受話器を置くと洗面所へ向かい、長い時間をかけて用を足すと、鏡の前に立って自分の顔を眺めた。そこに映っている姿は、写真の自分とはあまりにかけ離れてしまっている。鼻と考えるものと、口と見られるものが密集しているだけ。まるで禿げ鼠だ。

彼はそう考えて虚しく笑い、よたよたと寝室に向かった。ベッドに体を横たえ、胸の写真をもういちど取り出してみる。彼はこれまでと同じように長い時間をかけ、ゆっくりと深い深い眠りに落ちていった。

(後書き)

The Strokes - The End Has No
End
<http://jpn.youtube.com/watch?v=scvlHADBqc>

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5378d/>

鼠の電話番

2011年1月20日02時50分発行